

注意欠如・多動症 (ADHD)

DSM-5における診断基準

氏名:

年齢: 歳

記入日: 年 月 日

ADHDの診断には、アメリカ精神医学会の判断基準である「DSM-5」が用いられます。以下チェックリストは、「DSM-5精神疾患の分類と手引き」を引用し診断基準を作成しています。

| | | |
|----|--|--|
| A1 | 以下の不注意症状が6項目(17歳以上では5項目)以上あり、6ヶ月以上に渡って持続していたことがある。細かな注意ができず、ケアレスミスをしやすい。 | |
| | 注意を維持することが困難である。 | |
| | うわの空や注意散漫で、話をきちんと聞けないように見える。 | |
| | 指示に従えず、宿題などの課題をやりきることができない。 | |
| | 課題や活動を整理することができない。 | |
| | 精神的努力の持続が必要な課題を嫌がる。 | |
| | 課題や活動に必要なものをしばしば無くしてしまう。 | |
| | 外部からの刺激で注意散漫となりやすい。 | |
| | 日々の活動が忘れがちである。 | |

| | | |
|----|--|--|
| A2 | 以下の不注意症状が6項目(17歳以上では5項目)以上あり、6ヶ月以上に渡って持続していたことがある。細かな注意ができず、ケアレスミスをしやすい。 | |
| | 着席中に手足をもじもじしたり、そわそわした動きをする。 | |
| | 着席が期待されている場面で離席する。 | |
| | 不適切な状況で走り回ったりよじ登ったりする。 | |
| | 静かに遊んだり余暇を過ごすことができない。 | |
| | 衝動に駆られて突き動かされるような感じがして、じっとしていることができない。 | |
| | しゃべりすぎる。 | |
| | 質問が終わる前に出し抜けて答え始める。 | |
| | 順番待ちが苦手である。 | |
| | 他人の邪魔をしたり、割り込んだりする。 | |

| | | |
|---|--|--|
| B | 不注意、多動性/衝動性の症状のいくつかは12歳までに存在していた。 | |
| C | 不注意、多動性/衝動性の症状のいくつかは2つ以上の状況(家庭・学校・職場・社交場面など)で存在している。 | |
| D | 症状が社会・学業・職業機能を損ねている明らかな証拠がある。 | |
| E | 統合失調症や他の精神障害の経過で生じたのではなく、それらで説明することもできない。 | |

診断

混合型

2つの症状が混合して存在(過去6か月間「A1」と「A2」の両方を満たす)

不注意型

主に不注意の症状が存在(過去6か月間「A1」のみ満たす)

多動性/衝動性型

主に多動・衝動性の症状が存在(過去6か月間「A2」のみ満たす)